



TITLE:

<地域経済の現場から> 「町」に失われた場所に「ムラ」をつくる

AUTHOR(S):

浦田, 龍次

CITATION:

浦田, 龍次. <地域経済の現場から> 「町」に失われた場所に「ムラ」をつくる. 資本と地域 2006, 3: 40-41

ISSUE DATE:

2006-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66155>

RIGHT:

＜地域経済の現場から＞

「町」の失われた場所に「ムラ」をつくる

浦田龍次

昨年10月1日からJR 由布院駅の裏手、約1キロほどのところにある一軒家を借りた。新しくつくった「ムラづくりNPO 風の原っぱ」をここでスタートするためだ。

同じ日、湯布院町は、隣の挾間町、庄内町と合併して由布市となった。この合併問題を巡っては湯布院町内は混乱を極め、一時は町長リコールまでの騒ぎになり、私も合併反対の立場でこの問題に向き合ってきたが、結局、これを止めることができなかった。

「湯布院町」という名称は由布市の下に地名として残ったが、町としての行財政の決定権は失われた。私たちは「町」の失われた場所に「ムラ」をつくろうと新たなNPOをスタートさせた。

このNPOの話に入る前に、湯布院町のあまり知られていない、けれども湯布院を語る上で絶対に省くことのできないある部分について少し触れておきたい。

■基地の町

今では年間400万人の観光客が訪れる湯布院町。JR 由布院駅に降り立つと、多くの人々が正面にそびえる標高1853メートルの由布岳の姿に目を奪われる。しかし、同じ湯布院町の北部の日出生台(ひじゅうだい)という所に西日本最大、100年を超える軍事演習場があることを知る人はほとんどいない。

ここで湯布院の歴史を少しだけ振り返ってみたい。日清戦争が終わり、日露戦争に入ろうとする直前の1898年、湯布院の北部の山里、日出生台で旧陸軍による初めての軍事演習が行われた。以降、今日までの108年間、この地は、日本の軍事と戦争を支える場として使われ続けてきた。

記録によれば、敗戦後の1946年から11年間、日出生台には16,000人の米兵と4,000人の韓国兵による計20,000人の進駐軍が駐留。1950年から始まった朝鮮戦争に、ここで最終の訓練を行って出撃したという。その頃、日出生台には米兵を目当てに700人を越える売春婦も常駐。湯布院は「酒と女と米兵の町」と言われた。演習場の周辺地域では米兵による地域の女性に対する様々な性暴力事件が頻発。そのあまりの多さに、一時は女性が全員親戚のところに疎開し、男だけしかいない地域になってしまったとの記録が残されている。

風紀が荒れすさみ、観光客も寄りつかない状況に置かれていた由布院に、盆地を丸ごとダムに沈める計画が浮上してきたのは1952年のことだった。これには時

の青年団と農業団体が反対。最後は資金面の理由で、この計画は頓挫した。

しかし、1955年、いわゆる「昭和の大合併」で、由布院町と湯平村が合併して湯布院町が誕生。初代町長にダム反対運動の先頭に立っていた青年団の団長、岩男ひでかず氏が就任。ダムに換わる地域振興策として打ち出されたのが自衛隊誘致だった。かくて、湯布院町誕生の翌年の1956年、湯布院駐屯地は開隊された。

■町の現在と未来を決めるのは誰か

湯布院のこれまでの歴代町長らは口を開けば「由布院があるのは自衛隊のおかげ」「自衛隊との共存共栄」を強調してきた。しかし、そのようにしてきた本当の理由は、実は選挙対策だったと言って間違いないだろう。選挙の度に湯布院駐屯地前では早朝から午前8時の拡声器の使用可能時間まで、各候補者陣営が総動員をかけて、出勤する自衛隊員への無言での手振り挨拶という光景が繰り返られてきた。

旧湯布院町の人口約12,000人。うち有権者が約9,000人。選挙の際は、そのうち約2,000票が自衛隊関連票と言われ、町内では圧倒的な組織票である自衛隊票の行方が選挙の勝敗を大きく左右する。

それはつまり、この地に骨を埋めるわけではない、将来は移動転勤する自衛隊員らの投票の行方によって、湯布院町の未来が左右されるということに他ならない。

■深まる依存体質、失われる自立意識

湯布院の北部にある軍事演習場と、盆地の中心にある自衛隊駐屯地の存在によって、過去、湯布院町には膨大な額の国のおカネが落ち続けてきた。旧湯布院町でのここ数年の防衛関係事業の額は年間で約1億5,000万円。さらに99年からは米軍演習がさらに加わり、これに1億円が追加された。この他にも演習場の周辺の県道整備事業や、演習場内の整備、施設建設、機能強化によって巨額の税金がつぎ込まれてきた。

札束ではおをひっぱたくような国の出す政策に、湯布院町政も町内業者も防衛予算への依存度を深め、それにつれて、町や町民は自らが努力して自立のまちづくりを達成していこうとする意志を奪われてきた。

湯布院のまちづくりの先駆者たちは、そのような中で、住民自身のチエと努力によって湯布院ならではのまちづくりの道を模索してきた。その努力と個性的な取り組みによって、湯布院の名は全国に知られることになったが、残念ながら、その理念と夢を大多数の町民と共有するまでにいたることができなかった。

さらに湯布院町政との関係で言えば、町政のあまり

にも旧態依然とした古い体質に、接点をなかなか見いだせず、通じ合える信頼関係を築き上げることができずにきた。湯布院の特徴としてよく言われる「住民主導のまちづくり」はそれを目指したというよりは、そうせざるをえなかったという面を否定できまい。市町村合併問題では、湯布院のまちづくりの最大の急所とも言えるその部分を突かれ、合併へと力業で持ち込まれた。湯布院の「基地の町」としての長い歴史の中で、国や大きなものへの依存体質が、町民の間に深く染みこんでいたことも大きく影響したのではないかと私は考えている。

■ 地域に起きた2つの問題を経て

96年からの米軍演習問題、そして今回の合併問題と、近年における地域の問題で、そのどちらにおいても国と県の強硬な姿勢の前に私たち住民の抵抗の砦（とりで）は突破されてしまった。

ここで私はこんなことを考えた。もし今回、湯布院に起きた問題が、合併問題、米軍問題ではなくて、仮に産廃問題、原発問題、あるいはその他の問題だったら？ 湯布院町民はそれを阻止できただろうか。私は今の湯布院では難しいのではないかと考えてならない。つまり、問題の如何に関わらず、地域の中に起きてくる問題に対して、これにしっかりと向き合い、解決する力が、今、地域から失われているのではないか。人の体に自然治癒力、抵抗力があるように、住民が集まって構成する地域にも、そのような力があるのではないかと私は考えている。そのような、地域が本来持っているハズの自然治癒力、抵抗力のようなものをどうしたら回復できるのだろう。そんなことをこの問題を経て考えた。

それはまた、地域に住む住民の地域社会や共同体への参加意識、主権者としての自覚とも関わる問題で、一足飛びには無理にしても、時間をかけて、あらためてこのような意識と自覚を「醸成」していくことが、遠回りのようでいながら、結局は地域の力を取り戻していくのに今、必要なのではないだろうか。

そんな問題意識から、新たなNPOの立ち上げることになった。

■ 「風の原っぱ」の活動

風の原っぱの活動は、すでに昨年から動き出していて、活動の柱として、アイガモ農法によるコメづくりに取り組んでいる。

昨年は由布院盆地内の1ヶ所の田んぼ（1町歩）にアイガモ 80羽を放してアイガモ農法の米づくりに取り組んだが、今年是由布院盆地内6ヶ所の田んぼ（計2.5町歩）にアイガモ約500羽を放して米づくりを行っている。

人は食べ物を食べないでは生きていけない。その食べ物を支えているのは農だ。このあたりまえのことを、ふだん私たちは意識することなく暮らしている。「風の原っぱ」の活動の中心にアイガモ農法のコメ作りを置いたのは、暮らしの根っこを支える食と農への意識を持ち、そこに関わることが地域での暮らしを立て直す上での基本になるのではないかと考えたからだ。

また、アイガモ農法はたくさんの効用を持っている。田んぼに放したアイガモは虫や草を食べ、フンをし、そして水かきで田をかき混ぜてくれる。クチバシで稲の株もとをつついて刺激して成長を促してくれる。結果として、農薬や化学肥料を使う必要もなくなり、地域の自然環境への負荷を減らすことができる。これまで田んぼに関心のなかった人たちや子どもたちも田んぼに関心を持つようになる。冬には美味しい鴨肉が食べられ、お肉を食べることの意味、命をいただくことの意味も考えるかもしれない。そして、このような農法が由布院で普及すれば、減少しつつある由布院の田園風景を守り、自然環境の保護にも繋がっていくのではないかと考えている。

また、このような農作業に関わる時間を、暮らしの中に一部でも持つことは、地域に暮らすことの意味を意識し、考えるきっかけとなるだろう。若者たちや子どもたちにとっても、農業体験、他の人とともに汗を流して働く体験、自分の食べる食べ物を自分でつくる体験の場になるのではないかと考えている。

米づくりから少しずつ地域の食料自給度を高め、由布院ならではの農畜産物の生産、加工、販売などの産業連関の輪を地域につくりだしていきたい。

そしてこうした活動を通して、地域の中での人と人の関係をもう一度紡ぎ直して、地域の中で問題が起きたときに、それを共通の課題として捉え、解決に向けてお互いに話しあうことができる。そんな人と人の関係を地域の中で回復していけたらと考えている。

■ 混迷する由布市の中で

湯布院町という自治体が合併によって消滅して、もうかれこれ9ヶ月が過ぎた。時が経つのは早いものだ。予想されていたことではあるが、合併半年で新市の財政状況はすでに危機的状況に陥っていることを市長は認めざるをえなかった。

遠くなってしまった行政に、やるべきことはもちろんやってもらわねばならないが、それにしても一番大切なのは、住民が元気を出して自らの地域の未来を切り開いていくことだと思う。「風の原っぱ」を通して、あらたな由布院の元気を創り出していきたい。

（九州・由布院）